

きゅうり

1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
べと病	－	やや多	(1) 7月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年より高かった。(+) (2) 8月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並か多い予報。(±)
うどんこ病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年よりやや高かった。(+) (2) 8月の気温は、平年並か高い予報。(±)
斑点細菌病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年より高かった。(+) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報。(±)
黒星病	－	少	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 8月の気温は、平年並か高い予報。(－)
褐斑病	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報。(＋)
炭疽病	－	多	(1) 7月下旬の巡回調査での発生圃場率は、平年より高かった。(+) (2) 8月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報。(＋)
ワタアブラムシ	－	並	(1) 7月下旬の巡回調査の発生圃場率は、平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 8月はうどんこ病、褐斑病、炭疽病の重点防除時期なので、予防散布を徹底する。特に、褐斑病と炭疽病は降雨が続くと急増するので、発生状況や天候に応じて薬剤を選択する。
- (2) 発病葉は随時摘み取り、圃場外に持ち出す。特に、アーチ上部の発病葉は下位葉への伝染源となるので、優先的に摘み取る。
- (3) 薬剤散布は、株全体の葉の表裏にかかるよう、アーチの両側から十分量をムラなく散布する。
- (4) 草勢が低下している圃場では、追肥・整枝・摘葉などの適切な管理により、草勢の回復に努める。過繁茂は、薬剤の到達を妨げるだけでなく、病巣にもなるので注意する。

【褐斑病、炭疽病】

- (1) 両病害とも発生を確認してからでは防除が難しく、特に褐斑病は急激に圃場内に蔓延する。現在発生がみられなくても、予防散布に努める。
- (2) 発生がみられた場合には、発病葉を摘葉後、直ちにアミスターオプティフロアブル等のQoI剤や、ゲッター水和剤を散布する。発病葉を残すと、病斑部から多量の胞子が落下し、発病葉直下では生長点や新展開葉で発病して早期枯れ上がりの原因となるため、発病初期（図1、図2）の摘葉を徹底する。
- (3) QoI剤は耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、連用しない。



図1 褐斑病の初期病斑



図2 炭疽病の初期病斑

【うどんこ病】

- (1) うどんこ病は、葉裏や茎、側枝で蔓延するので注意して観察し、発生がみられたら早期に防除を行う。
- (2) うどんこ病耐病性品種であっても草勢が衰えると蔓延するため、草勢維持に努める。

【べと病、斑点細菌病、黒星病】

- (1) 高温、乾燥時には発病が抑制されるが、気温が低下し降雨が予想される場合や8月後半以降は、これらの病害にも効果がある薬剤を選択する。

【ワタアブラムシ】

- (1) 発生が見られる場合は、引き続き防除を行う。

【ワタヘリクロノメイガ (ウリノメイガ)】

- (1) 例年発生が多く見られるのは8月から9月にかけてであるが、幼虫もしくは葉が透ける食害痕や果実の表面をなめたような食害が見え始めたら、アフーム乳剤、コテツフロアブル等の効果のある薬剤で防除する。
- (2) 若齢幼虫はヨトウガに似ているが、中齢幼虫では背面に白い2条の線があるので区別できる (図3)。



図3 ワタヘリクロノメイガ (左：中齢幼虫と果実の食害痕、右：成虫)

3 防除上の留意事項

- (1) 薬剤は、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するため、連用せず異系統の薬剤をローテーション散布する。
- (2) 銅水和剤 (有機銅も含む) やモレスタン水和剤は、高温時に使用すると薬害が発生することがあるので注意する。
- (3) 農薬の使用基準に基づき、有効成分毎の総使用回数には十分注意する。